

九州国際大学 紀要第80号（平成31年 3 月）  
社会文化研究所

## 不安感調査をもとにした初年次教育の検討

新 美 尚 行  
田 鹿 紘

# 不安感調査をもとにした初年次教育の検討

新 美 尚 行  
田 鹿 紘

## 要旨

本研究は、大学新生が抱く不安感の実態調査と、不安感の実態をもとにした初年次教育の役割・教育内容の検討を目的として質問紙調査を実施した。本調査から得られた知見は、①入学当初から1年次後半にかけて不安感の解消手段は「自己解決的手段」から「他者解決的手段」へと変化している、②友人関係構築のきっかけは「講義」「部活動・サークル」「フレッシュャーズミーティング」が主である、③「日常生活不安」や「評価不安」は有意に減少する一方、「大学不適応」は漸増傾向にある、の3点であった。以上の結果から、①大学生としての基礎力構築を意図した授業内容の継続的な展開、②クラス分けにおける女子学生への配慮、③友人関係構築を促す環境整備、④学生と接する際における教員の配慮の必要性が示唆された。

キーワード：初年次教育、大学生基礎力、学生生活不安、友人関係構築手段、不安解消手段

## I 緒言

### 1. 高等教育をとりまく昨今の状況と初年次教育

文部科学省（2018）によれば、2017年度の我が国の学士課程への進学率は約50％であり、専門学校等を含めた高等教育機関全体への進学率はおよそ80％にのぼる。減少していた18歳人口は2009年から2020年ごろまではほぼ横ばい

で推移する一方、2021年頃からは再び減少することが予想され、高等教育機関への進学率は更に増加し、誰もが望めば高等教育機関に進学できる時代（いわゆる大学全入時代）が続くことが予想される。この様な昨今の状況の中、本来進学できなかった学生層の進学、学力の低下、大学への不適応などの問題が叫ばれ、「学生の多様化や拡大化が進行し従来の大学教育の取り組みでは、大学は十分な教育機能を果たすことが難しくなっている」（古里、2018）状況にある。その結果、中途退学者の増加、それに伴った大学経営への影響、卒業後の進路未定者の増加など様々な問題が派生している。これら大学をとりまく社会状況を背景として関心が高まったのが初年次教育である。

初年次教育は2000年代以降から高等教育において高い関心のもと取り組みが進められ、入試の難易度を問わずに多くの大学で導入されるようになった背景は、「①学生の変容、②政策的側面の変化、すなわち大学をより教育を重視する場へと変革しようとする政策の存在、③教育効果の提示といった内在的および外在的な圧力の存在という3点」（山田、2013）に集約される。この初年次教育の概念や位置づけは当初不明確であったが、2008年の中央教育審議会において公表された「学士課程教育の構築に向けて（答申）」にて、「高等学校や他大学からの円滑な移行を図り、学習及び人格的な成長に向け、大学での学問的・社会的な諸経験を成功させるべく、主に新入生を対象に総合的につくられた教育プログラム」あるいは「初年次学生が大学生になることを支援するプログラム」として説明された。我が国においては、「レポート・論文などの文章技法」、「コンピュータを用いた情報処理や通信の基礎技術」、「プレゼンテーションやディスカッションなどの口頭発表の技法」、「学問や大学教育全般に対する動機付け」、「論理的思考や問題発見・解決能力の向上」、「図書館の利用・文献検索の方法」などが重視されていることが明記されるとともに、「学習の動機づけや習慣形成に向けて、初年次教育の導入・充実を図り学士課程全体の中で適切に位置づける」（文部科学省、2008）ことが示された。山田（2013）は、現在では初年次教育のプログラムの整備・標準化が進む一方で、多様化が進展している段階にきていると述べ、初年次教育の活用がこれまでの学力低下や動機低下への対処や、中退率を低下させるためといった理由のみではなく、大学

の規模、国公私大設置形態、入試レベルの差異等一様ではないことを背景とした、初年次教育の多面的・重層的になっていることを最近の動向とし、「多様化に対応したニーズの把握と分類が不可欠である」（山田、2013）としている。上記を踏まえたうえで、次節では九州国際大学（以下、本学と記す）現代ビジネス学部（以下、本学部と記す）地域経済学科（以下、本学科と記す）における初年次教育の取り組みについて紹介をする。

## 2. 本学科における初年次教育の取り組みと調査研究目的

### 1) フレッシュャーズミーティングについて

本学においては2017年度に新学部（本学部）が設立された。入学後すぐに本学部1年生を対象とした宿泊研修（1泊2日）「フレッシュャーズミーティング（以下、FMと記す）」が新学部設立以前より継続的に実施されている。FMの主たる目的には友達作りが掲げられ、様々なアクティビティを実施している<sup>注1)</sup>。FMの運営は本学部に所属する2学年以上の学生から構成されるチューデントアシスタント（以下、SAと記す）によって実施されている。SAは学生から構成されていることから、新入生にとっては身近な相談相手となり、教員と新入生との橋渡しの役目として重要なポジションを担っている。新学部設立後2年間のFMの主な活動内容は、①入門セミナークラス（以下、クラスと記す）別でのアクティビティの実施（1日目午後）、②クラス別での履修登録指導（1日目夜）、③クラス対抗アクティビティ（2日目午前）、④観光（2日目午後）であった。これらの活動を通して新入生同士の親睦を図るとともに、スムーズな大学生活への移行を促すことをねらいとしている。

### 2) 入門セミナーについて

本学の第1年次基礎科目内の必修科目として全学部にて入門セミナーⅠ（春学期開講）・Ⅱ（秋学期開講）が開講されている。この入門セミナーはいわゆる初年次教育の科目として配置されており、本学科では、スポーツ推薦入学者を除く学生においては男女学生を均等割りにするクラス分けが行われている。本学科における2018年度入門セミナーⅠの達成目標は、

- (1) 自ら問題を発見し、自主的に学び、問題解決へ向けた方策を考えることが

できる。

- (2) 充実した大学生活を送るために必要な学習習慣と、規則正しい生活習慣を身につける。
- (3) 情報収集したり分析したり課題発見したりすることなどを協力して行える。
- (4) 自分たちが調べ構想し考えた成果を、レポートなどを使用して効果的に発表できる。
- (5) 学習の基礎となる読解力や要約力、文章構成力や論理的思考力を身につける。
- (6) 専門科目の学修のための方向性を理解して、2年次以降の、そして卒業後の自分自身の、将来へ向けた道筋を示すことができる。

であり、入門セミナーⅡの達成目標は、

- (1) 自ら問題を発見し、自主的に学び、問題解決へ向けた方策を考えることができる。
- (2) 充実した大学生活を送るために必要な学習習慣と、規則正しい生活習慣を身につける。
- (3) 情報収集したり分析したり課題発見したりすることなどを協力して行える。
- (4) 自分たちが調べ構想し考えた成果を、レジュメやパワーポイントを使用して効果的に発表できる。
- (5) 学習の基礎となる読解力や要約力、文章構成力や論理的思考力を身につける。
- (6) 専門科目の学修のための方向性を理解して、2年次以降の、そして卒業後の自分自身の、将来へ向けた道筋を示すことができる。

と定められ、1年間を通した学習によって、大学生としての必要な基礎力の構築、すなわち、①大学生として身につけるべき基礎的な学習スキルや能力の定着・延伸、②社会人基礎力として必要なチームワーク、情報収集力、知識活用力、問題発見・解決能力、プレゼンテーション能力、自発的・自覚的に行動できる力等の定着・延伸、③大学における人間関係や居場所の構築のためのベースがねらいとして掲げられている。新学部設立1年目の本学科における2017年

度入門セミナーにおいては、その授業計画内容は統一されていたものの、学生の学習状況等により各クラスによって進捗状況にばらつきが生じたことで、クラスによる基礎力の習得度合いに差が生じていることが（2017年度入学生が2年次になった際の実感）課題として挙げられた。そこで入門セミナーの授業計画の見直しとともにテキストを作成することが提案され、当初は市販のテキストを利用する案も出されたが、「本学の学生にあった内容にしたほうが良い」<sup>注2)</sup>との思いから学科に所属する4名の教員を中心としてテキスト作成が行われた。テキストを作成することによって、学科全体として学習の進捗状況を一定化し、学習内容の質の保証を図った。

### 3) 学生ニーズの把握を目的とした不安感調査

高等教育の大衆化を背景に、大学への進学者が多様化している現状は本学にも当てはまる。様々な気質を持った学生が一堂に会し学生生活を送る上では、様々な不安感を抱いていることは容易に想像できる。それらの不安感はやがて修学意欲の低下や、休学・退学を招く一因になりかねない。学生への相応しい大学教育の在り方について古城（1996）は、相応しい大学教育を考える際には学生が抱く不安の実態分析が必要であるとし、また、その大学改革については「大学生が大学のみならず日常生活においてどのような不安を多く感じているのかを大学教官自らが知り、それをもとに改善」（藤井、1998）していく姿勢が求められると述べる。昨今では藤井（2013）によって作成された大学生活不安尺度を用いた研究が多くなされている。特に理学療法学科所属学生を対象とした研究が散見され（菅沼、2015a、2015b；金子、2015a、2015b、2017；佐野、2017）、国家資格取得を前提として入学した新入生が抱える不安の解明や、他学科の学生との比較検討がなされている。本学においては、その学部の性質からも様々な目的や将来構想を抱いて入学をしてきた学生が多く、それらの学生が如何なる不安感を抱いているのかを把握することは、多様化した学生のニーズを知る上でも重要であり、大学教育内容を検討する資料となり得る。そこで本研究の目的は以下の2点に集約される。すなわち、①本学科新入生の抱く不安感の実態調査、②不安感の実態をもとにした初年次教育の役割と教育内容の検討である。

## Ⅱ 方法

### 1. 調査概要

本研究における調査対象者はいずれも2018年度本学科新入生を対象とした。

#### 1) 1回目調査

2018年4月4日から5日にかけて実施されたFM初日に参加した242名に対して質問紙調査を実施。質問紙は242部配布し、242部回収、分析対象は欠損回答の無い228部（有効回答率94.2%）を対象とした。

#### 2) 2回目調査

「入門セミナーⅠ」の第8回目（2018年6月5日）に出席した202名を対象に質問紙調査を実施。質問紙は202部配布し、202部回収、分析対象は欠損回答の無い198部（有効回答率98.0%）を対象とした。

#### 3) 3回目調査

「入門セミナーⅠ」の第14回目（2018年7月24日）に出席した214名を対象に質問紙調査を実施。質問紙は214部配布し、214部回収、分析対象は欠損回答の無い210部を（有効回答率98.1%）を対象とした。

#### 4) 4回目調査

「入門セミナーⅡ」の第1回目（2018年9月25日）に出席した209名を対象に質問紙調査を実施。質問紙は配布、回収ともに209部、分析対象は欠損回答の無い209部を（有効回答率100%）を対象とした。

#### 5) 最終調査

「入門セミナーⅡ」の第13・14回目（2018年12月18日）に出席した198名を対象に質問紙調査を実施。質問紙は配布、回収ともに198部、分析対象は欠損回答の無い198部を（有効回答率100%）を対象とした。

### 2. 調査内容

#### 1) 1回目調査

##### (1) 大学生活における不安感

藤井（2013）によって作成された大学生活不安尺度（CLAS；College Life Anxiety Scale）30項目を用いて学生が抱く大学生活への不安感を「はい」「い

いえ」の2件法で回答を求めた。CLASは3つの下位尺度から成り立ち、各下位尺度の得点と全体得点から不安感を多面的に測定する。各下位尺度の項目は表1の通りであり、更に、大学の日常生活に対する不安感（日常生活不安：D得点、Daily Life anxiety）、大学における単位や試験に対する不安感（評価不安：E得点、Evaluation anxiety）、不登校や中退といった修学上の問題を生じさせる大学不適応感（大学不適応：C得点、College maladjustment）、全体得点から学生を9つのタイプに分類することでより詳細な学生タイプの判定が可能となる。藤井（2013）による各タイプ別解釈は以下の通りである。

① 大学不適応深刻型（DEC型）

大学の日常生活、授業や試験に対する不安が高く、今所属している大学が自分に合っていないのではないかと強く思っているタイプ。大学生活を送っていく中で感じている様々な不安からストレスが非常にたまっている傾向がある。

② 学業不適応型（dEC型）

大学の日常生活に対する不安は低いが、授業や試験に対する不安が高く、また、今所属している大学が自分に合っていないのではないかと強く思っているタイプ。特に学力面で不安を抱えている傾向が強い。

③ 大学生活不適応型（DeC型）

授業や試験に対する不安は低いが、大学の日常生活に対する不安が高く、また、今所属している大学が自分に合っていないのではないかと強く思っているタイプ。大学の日常生活に対して漠然とした不安が長く続き、できれば今の大学に通いたくない気持ちが強まっている傾向がある。

④ 大学拒否型（deC型）

今所属している大学が自分に合っていないのではないかと強く思い、できれば進路変更なども考えているタイプ。何らかの理由により、現在の大学に対して強い不満を持っている傾向がある。

⑤ 過剰不安型（DEc型）

大学の日常生活、授業や試験に対する不安が共に高いタイプ。このタイプは、将来に対して悲観的に物事をとらえる、いわゆる「予期不安」を強く持っている傾向がある。



⑥ 日常生活不安型（Dec型）

学業面についてはあまり不安を感じていないが、大学の日常生活に対して不安の高いタイプ。漠然とした不安を長く感じ続けることによって、心の不調を生じる可能性がある傾向がある。

⑦ 評価不安型（dEc型）

大学の日常生活についてはあまり不安を感じていないが、学業面について不安の高いタイプ。大学の成績への関心が非常に高いため、試験前になると、いわゆる「テスト不安」が高まりやすい傾向がある。

⑧ 大学不適応境界型（dec型）

何か問題を抱えているというわけではないが、大学生活において少しつまづきを感じかけている状況であると言えるタイプ。

⑨ 大学生活充実型

現在のところ、大学生活や学業面に対して不安が少なく、充実した大学生活を送っているタイプ。

表1 CLAS下位尺度項目

日常生活不安（D得点）	
1)	大学で人が自分のことをどう思っているのか、気になります。
4)	4年間で卒業できるかどうか、不安です。
7)	留年したらどうしようと、気になります。
10)	万一事故にあったり、病気をしたらどうしようと心配になることがあります。
13)	友達と一緒に何かをしなければいけないとき、うまく協力できるか不安な気持ちになります。
16)	サークルで先輩たちとうまくつき合えるか心配です。（サークル未加入の人は入ったと仮定して答える。）
19)	1時間目の授業にきちんと起きて出席できるかどうか、不安です。
22)	何らかの団体に突然勧誘されないか、不安です。
25)	先生が近くにいと気になって仕方がありません。
28)	1カ月の生活費が足りるかどうか、心配です。
30)	授業中、先生の言っている内容がわからなくて、不安になることがあります。
27)	大学の先生と話をするとき、とても緊張します。

24)	先生に「研究室まで来るように」と呼ばれたら、何を言われるか、とても気になります。
21)	将来、自分の希望先に就職できるかどうか、不安です。
評価不安 (E得点)	
2)	授業中に何かをしなければならないとき、へまをするのではないかと不安になることがあります。
5)	必修科目の成績が「F (不可)」だったらどうしようと心配になることがあります。
8)	テスト中に時間が残り少なくなると、自分の考えがまとまらなくなります。
11)	テストを受けていて、わからない問題に出会ったとき、頭の中が真っ白になってしまうことがあります。
14)	成績のことが気になって仕方ありません。
17)	大学の成績のことを考えると、憂鬱です。
20)	申請した授業の単位がきちんともらえるかどうか心配です。
23)	テスト中、緊張して自分の力が発揮できません。
26)	授業で発表するとき、声が震えることがあります。
29)	卒業論文がうまく書けるかどうか、不安です。
18)	テストを受けるとき、悪い点をとってしまうのではないかと心配になります。
大学不適応 (C得点)	
3)	こんな大学にいたら自分がだめになるのではないかと憂鬱な気分になることがあります。
6)	この大学にいと、何か不安な気持ちになります。
9)	できることなら、転学あるいは転部したくて仕方ありません。
12)	入学した学部が自分に合っていないような気がして不安です。
15)	大学を退学したいと思うことがあります。

## (2) 不安感の解消法

大学生活において抱いた不安感を解消する（和らげる）手段の有無を「1. ある」「2. ない」の2件法で回答を求めた。

### (3) 具体的な不安感の解消法

質問(2)で「1. ある」と回答した者に対して、具体的な不安の解消（和らげる）手段を自由記述にて回答を求めた。

### (4) 本学進学について

本学が第一志望の大学であったかを「1. はい」「2. いいえ」の2件法で

回答を求めた。

## 2) 2 回目調査

- (1) 性別
- (2) 大学生活における不安感（1 回目調査と同様）
- (3) 不安感の解消法

調査①にて抽出された不安感の解消法について、類似している回答を統合した26項目から、不安感の解消法としてあてはまる項目すべてを選択してもらった（複数回答可）。

- (4) 友達ができたきっかけ

大学生活において友達ができたきっかけを自由記述にて回答を求めた。

## 3) 3・4 回目調査

- (1) 性別
- (2) 大学生活における不安感（1 回目調査と同様）
- (4) 最終調査

- (1) 性別
- (2) 大学生活における不安感（1 回目調査と同様）
- (3) 不安感の解消法（2 回目調査と同様）
- (4) インタビュー調査への協力依頼

不本意入学の（本学が第一志望ではない）学生で、1 年を経て本学で4 年間頑張ろうという気持ちに変化した者へのインタビュー調査への協力依頼を行い、学籍番号と氏名の記入を求めた。尚、アンケート調査同様にインタビュー調査への協力によって不利益を被ることは一切なく、個人情報には細心の注意を払い管理する旨を伝えている。

## 3. 分析

すべての統計解析にはEZRを使用した。EZRはRおよびR コマンダーの機能を拡張した統計ソフトウェアであり、自治医科大学付属さいたま医療センターホームページで無償配布されている（Kanda, 2013）。CLAS 尺度得点を用いた分析においては藤井（1998）の先行研究を参考に、素点を用いて得られ

た下位尺度得点について比較を行った。統計的解析においては、カイ二乗検定、一元配置分散分析および多重比較（tukey 法）を行い、有意水準は 5 % とした。

#### 4. 倫理的配慮

調査においては質問紙を配布した際、調査の趣旨を確認し、個人情報に厳重に保護をする説明をした。質問紙は回収後数回積み替えし、順番を入れ替えることで個人を特定できる要素を完全に排除した。

### Ⅲ 結果

#### 1. 不安解消（和らげ）の手段と本学への進学について

不安を解消する（和らげる）手段（以下、不安解消手段と記す）の有無をたずねた結果、「ある」42.5%、「ない」57.5%で、本学が第一志望であったか否かは「はい」57.0%、「いいえ」43.0%であった（表2）。

表2 不安解消手段と本学進学について

質問	回答			
	n	%	n	%
不安を解消する（和らげる）手段はあるか	ある		ない	
	97	42.5	131	57.5
本学が第一志望だったか	はい		いいえ	
	130	57.0	98	43.0

#### 2. 不安解消手段について

##### 1) 2 回目調査と最終調査の不安解消手段の推移

2 回目調査と最終調査における不安解消手段を比較した（表3）。結果、2 回目調査では「好きなことをする」（n=115）が最も多く、次いで「寝る」（n=110）、「音楽を聴く」（n=100）、「高校の友人に相談する」（n=98）、「大学の友人に相談する」（n=95）が上位 5 項目として挙げられた。最終調査においては、「大学の友人に相談する」（n=104）が最も多く、次いで「好きなことを

する」(n=101)、「高校の友人に相談する」「寝る」(n=93)、「音楽を聴く」(n=69)が上位5項目として挙げられた。

更に、2回目調査と最終調査における不安解消手段について、各項目の回答率の比較を行った(表4)。結果、「音楽を聴く」「買い物をする」「歌を歌う」の3項目において有意な差が認められ(いずれも $p<0.05$ )、いずれの項目においても最終調査に比して2回目調査が高い「はい」の回答率を示した。

表3 不安解消手段上位10項目

2 回目調査 (n=198)			最終調査 (n=198)		
順位	項目	n	順位	項目	n
1	好きなことをする	115	1	大学の友人に相談する	104
2	寝る	110	2	好きなことをする	101
3	音楽を聴く	100	3	高校の友人に相談する	93
4	高校の友人に相談する	98		寝る	
5	大学の友人に相談する	95	5	音楽を聴く	69
6	友人と遊ぶ	81	6	母親に相談する	59
7	外出する	60	7	ゲームをする	58
	歌を歌う		8	外出する	50
9	ゲームをする	57	9	体を動かす	44
	体を動かす		10	歌を歌う	42

2回目調査から最終調査にかけての順位上昇：↑、下降：↓

表4 回答率に有意差が認められた不安解消手段(%)

項目	2回目調査 (n=198)		最終調査 (n=198)		p値
	はい	いいえ	はい	いいえ	
音楽を聴く	50.5	49.5	39.9	60.1	0.043 *
買い物をする	25.3	74.7	15.7	84.3	0.029 *
歌を歌う	30.3	69.7	21.2	78.8	0.049 *

カイ二乗検定を実施

\*: $p<0.05$

## 3) 不安解消手段の性差

最終調査における不安解消手段を性差にて比較した（表5）。結果、男子学生では「好きなことをする」（n=82）が最も多く、次いで「大学の友人に相談する」（n=81）、「寝る」（n=78）、「高校の友人に相談する」（n=68）、「音楽を聴く」（n=61）が上位5項目として挙げられた。女子学生においては、「高校の友人に相談する」（n=25）が最も多く、次いで「大学の友人に相談する」（n=23）、「好きなことをする」「寝る」（n=19）、「母親に相談する」「音楽を聴く」（n=18）が上位5項目として挙げられた。

更に各項目の回答率の比較を性差にて行った（表6）。結果、「寝る」（ $p<0.01$ ）「ゲームをする」（ $p<0.001$ ）「外出する」（ $p<0.05$ ）「体を動かす」（ $p<0.01$ ）の4項目において有意な差が認められ、いずれの項目においても女子学生に比して男子学生が高い「はい」の回答率を示した。

表5 不安解消手段上位10項目（性別）

男性（n=149）			女性（n=49）		
順位	項目	n	順位	項目	n
1	好きなことをする	82	1	高校の友人に相談する	25
2	大学の友人に相談する	81	2	大学の友人に相談する	23
3	寝る	78	3	好きなことをする	19
4	高校の友人に相談する	68	4	母親に相談する	18
5	音楽を聴く	61		音楽を聴く	
6	友人と遊ぶ	56	6	寝る	15
7	ゲームをする	54	7	友人と遊ぶ	13
8	外出する	44	8	兄弟・姉妹に相談する	12
9	母親に相談する	41	9	買い物をする	10
10	体を動かす	40	10	先輩に相談する	8
				歌を歌う	

表6 回答率に有意差が認められた不安解消手段（性別・％）

項目	男性 (n=149)		女性 (n=49)		p値	
	はい	いいえ	はい	いいえ		
寝る	52.3	47.7	30.6	69.4	0.008	**
ゲームをする	36.2	63.8	8.2	91.8	0.000	***
外出する	29.5	70.5	12.2	87.8	0.014	*
体を動かす	26.8	73.2	8.2	91.8	0.005	**

カイ二乗検定を実施

\*\*\*:p<0.001, \*\*:p<0.01, \*:p<0.05

### 3. 友達ができたきっかけについて

大学入学後に友達ができたきっかけをたずねた（表7）。結果、「入門セミナー」（n=51）が最も多く、次いで「部活・サークル」（n=46）、「FM」（n=44）、「講義」（n=26）、「共通の友達がいた」（n=7）が上位5項目として挙げられた。

表7 大学入学後に友達ができたきっかけ

順位	項目	n
1	入門セミナー	51
2	部活・サークル	46
3	FM	44
4	講義	26
5	共通の友達がいた	7
6	SNS	4
7	生協委員	3
	話しかけた	
9	通学途中	2
	部活体験	1
	アルバイトが一緒	
	入学式	
	話しかけられた	
10	学食	1
	学生自治会	
	空き時間	

#### 4. CLAS尺度得点について

##### 1) CLAS尺度得点による学生タイプの分類と割合の変動

各調査結果より学生を9つのタイプに分類し、割合の変動を比較した（表8）。結果、学生のタイプはいずれの調査においても「⑤過剰不安型」（1回目：18.0%、2回目：16.2%、3回目：15.2%、4回目：13.4%、最終：13.1%）が最も多く、4回目・最終調査では「①大学不適応深刻型」が「⑤過剰不安型」とともに最も高い割合を示した。1回目調査においては「⑦評価不安型」が2番目に高い割合を示したが、2回目・3回目調査では「①大学不適応深刻型」が2番目に高い割合を示した。またいずれの調査においても「④大学拒否型」が3番目に高い割合を示した。

表8 学生のタイプ別分類と変動

学生タイプ	1回目調査			2回目調査			3回目調査			4回目調査			最終調査		
	n	%	順位	n	%	順位	n	%	順位	n	%	順位	n	%	順位
① 大学不適応深刻型	14	6.1	4	24	12.1	2	24	11.4	2	28	13.4	1	26	13.1	1
② 学業不適応型	8	3.5	6	7	3.5	5	7	3.3	5	5	2.4	6	4	2.0	5
③ 大学生活不適応型	3	1.3	7	4	2.0	7	4	1.9	7	6	2.9	5	3	1.5	7
④ 大学拒否型	20	8.8	3	16	8.1	3	17	8.1	3	24	11.5	3	22	11.1	3
⑤ 過剰不安型	41	18.0	1	32	16.2	1	32	15.2	1	28	13.4	1	26	13.1	1
⑥ 日常生活不安型	14	6.1	4	7	3.5	5	7	3.3	5	5	2.4	6	4	2.0	5
⑦ 評価不安型	22	9.7	2	16	8.1	3	16	7.6	4	10	4.8	4	15	7.6	4
⑧ 大学不適応境界型	0	0.0	8	0	0.0	8	0	0.0	8	0	0.0	8	0	0.0	8
⑨ 大学生活充実型	106	46.5		92	46.5		103	49.1		103	49.3		98	49.5	

##### 2) CLAS尺度得点の比較

各調査における「合計得点」「D得点」「E得点」「C得点」の平均値を算出し、それぞれの平均値について調査間での比較を行った（表9）。結果、「D得点」「E得点」において有意な差が認められ（D得点： $p<0.01$ 、E得点： $p<0.05$ ）、「D得点」では最終調査（4.20）に比して1回目調査（5.41）が高い数値を示し、「E得点」では最終調査（4.05）に比して1回目（5.12）・2回目（5.15）・3回目調査（5.06）が高い数値を示した。「合計得点」「C得点」においては調査間の数値に有意差は認められなかった。



表9 CLAS尺度得点の比較（一元配置分散分析）

項目	平均値 (SD)										F 値
	1 回目調査	2 回目調査	3 回目調査	4 回目調査	最終調査						
	(n=228)	(n=198)	(n=210)	(n=209)	(n=198)						
合計得点	11.24 (7.01)	10.97 (8.10)	10.76 (7.12)	9.91 (8.31)	9.3 (8.27)	2.22	n.s.				
日常生活不安 (D得点)	5.41 (3.67)	4.91 (3.91)	4.67 (3.43)	4.57 (4.03)	4.20 (4.00)	2.96	**				
評価不安 (E得点)	5.12 (3.31)	5.15 (3.70)	5.06 (3.46)	4.35 (3.73)	4.05 (3.73)	4.11	*				
大学不適応 (C得点)	0.70 (1.12)	0.90 (1.45)	1.03 (1.31)	0.98 (1.40)	1.04 (1.49)	2.29	n.s.				

tukey法による多重比較を実施

n.s.:not significant,\*\*:p<0.01,\*:p<0.05

日常生活不安（D得点）：1 回目調査＞最終調査

評価不安（E得点）：1・2・3 回目調査＞最終調査

### 3）CLAS尺度項目の比較

入学当初と1年次後半の不安感の変化を明らかにする目的から、1 回目調査と最終調査におけるCLAS尺度項目について、各項目の回答率の比較を行った（表10）。結果、14項目において有意な差が認められ、日常生活不安における「先生が近くにいると気になって仕方ありません」（ $p<0.05$ ）と、大学不適応における「大学を退学したいと思うことがあります」（ $p<0.001$ ）の2項目が1 回目調査に比して最終調査が高い「はい」の回答率を示した。その他の12項目においては最終調査に比して1 回目調査が高い「はい」の回答率を示した。

表10 回答率に有意差が認められたCLAS尺度項目（％）

項目	分類	1 回目調査 (n=228)		最終調査 (n=198)		p値	
		はい	いいえ	はい	いいえ		
大学で人が自分のことをどう思っているのか、気になります	日常生活不安	48.2	51.8	30.8	69.2	0.000 ***	↓
留年したらどうしようと、気になります		50.9	49.1	33.8	66.2	0.000 ***	↓
友達と一緒に何かをしなければいけないとき、うまく協力できるか不安な気持ちになります		38.2	61.8	25.8	74.2	0.009 **	↓
将来、自分の希望先に就職できるかどうか、不安です		71.9	28.1	55.6	44.4	0.000 ***	↓
先生に「研究室まで来るように」と呼ばれたら、何を言われるか、とても気になります		47.8	52.2	33.3	66.7	0.003 **	↓
先生が近くにいると気になって仕方がありません		15.8	84.2	25.8	74.2	0.015 *	↑
1 カ月の生活費が足りるかどうかが心配です		31.1	68.9	20.7	79.3	0.019 *	↓
授業中に何かをしなければならないとき、へまをするのではないかと不安になることがあります	評価不安	52.6	47.4	28.3	71.7	0.000 ***	↓
必修科目の成績が「F（不可）」だったらどうしようと心配になることがあります		63.6	36.4	44.9	55.1	0.000 ***	↓
成績のことが気になって仕方ありません		53.1	46.9	36.9	63.1	0.002 **	↓
テストを受けるとき、悪い点をとってしまうのではないかと心配になります		61.0	39.0	40.9	59.1	0.000 ***	↓
申請した授業の単位がきちんともらえるかどうか心配です		57.0	43.0	46.5	53.5	0.037 *	↓
卒業論文がうまく書けるかどうか、不安です		67.5	32.5	53.5	46.5	0.004 **	↓
大学を退学したいと思うことがあります	大学不適応	6.6	93.4	19.7	80.3	0.000 ***	↑

\*\*\*:p<0.001, \*\*:p<0.01, \*:p<0.05

1 回目調査から最終調査にかけての「はい」の割合、上昇：↑，減少：↓

## Ⅳ 考察

### 1. 不安解消手段構築としての初年次教育内容の検討

本調査対象者における不安解消手段の上位10項目の変化を、入学当初と1年次後半とで比較すると、2 回目調査段階においては自己解決的手段（「好きなことをする」：1 位、「寝る」：2 位、「音楽を聴く」：3 位）が上位を占めていたが、最終調査段階においては自己解決的手段に加え、他者解決的手段（「大

学の友人に相談する」：1位、「高校の友人に相談する」：3位、「母親に相談する」：6位）も上位に挙げられた。この結果は、大学生が不安や悩みの相談相手として「友人」や「家族」をあげている一般財団法人日本私立大学連盟（2018）の報告とも一致する。また、自己解決的手段における「音楽を聴く」「買い物をする」「歌を歌う」の3項目については2回目調査から最終調査にかけて有意に「はい」の回答率が減少した。更に、不安解消手段について性差にて比較を行ったところ、男子学生は女子学生と比較して自己解決的手段が上位に上げられる一方で、女子学生においては他者解決的手段が上位に多く挙げられた。中でも自己解決的手段にあたる「寝る」「ゲームをする」「外出する」「体を動かす」の4項目については、男子学生に比して女子学生の「はい」の回答率が有意に減少した。

大学生活における負担要因とソーシャルサポートに関する調査を行った由良ら（2013）によれば、ソーシャルサポートには日常生活の満足度と相関があり、社会への進出や日常の様々な不安を抱えた学生にとっては、身近にいる親の存在や友人のサポートが重要であると報告されている。従って、大学入学後の新たな環境における人間関係の構築は不安解消の手段として大きな役割を担っていると言える。特に友人関係について着目すると、本調査対象者においては講義関係（「入門セミナー」：51名、「講義」：26名）や、「部活動・サークル」（46名）、「FM」（44名）が大学入学後の友人ができたきっかけの主な理由に挙げられている。部活動やサークルといった組織に所属をしていない学生にとっては、講義を通じた交流が友人関係構築の役割を担っており、特に初年次教育科目の入門セミナーはその中核を担っていることが明らかとなった。

しかしながら、この友人関係の構築においては、友人関係の構築それ自体が負担を生み出す原因にもなりかねないことに注意が必要である。すなわち、「良好な友人関係を築くことができなかった場合、それは精神的な安定性と生活の満足度の低下を意味し、そしてやがては生活の充実感も低下する」（由良ら、2013）のである。また、本調査対象者においては多くの学生が講義を通して友人関係を構築する機会を得ているが、太田・桜井（2003）の講義時間外のキャンパスで居場所を見つけられない学生は孤立感を深めてしまい、心理的問題に

発展しやすいといった報告からも、講義外での人間関係構築をサポートする環境づくりも重要である。更に、本学科の女子入学生に着目すると、男子入学生の205名に比べ62名と数が少なく、女子学生を均等割りにするクラス分けを行うと、1ゼミあたりの女子学生の人数は4～5名と少なくなってしまう状況にある。この状況下においては、気のあった友人関係の構築といった点で男子学生よりも不利である可能性が推察される。対して男子学生は14～15名と安定的なマッチングが存在する可能性が高い。この状況で女子学生が部活やサークルに入らなければ、友達作りの残るきっかけとして大きなものは講義のみになってしまう。藤田・岡本（2010）によって青年期後期の娘とその母親との関係を考察した報告では、母子関係に依存する女子学生は64.7%であると示していることから、学内にて良好な友人関係を構築できなかった学生については、より母親への依存度が高まることが推察される。また、「表面的な友達しかいない者は不適応状態になりやすい」岡田（2007）との指摘からも、女子学生の配置についての工夫・検討も必要である。

本学の初年次教育プログラムとして位置づけられているFMには講義外での友人関係構築の場としてその有効性が期待できるものの、アクティビティの実施に至ってはクラスでの実施もしくはクラス対抗に留まり、クラス外の学生との交流機会はプログラム内にはほとんどない。しかしながら、FMにおいては大学入学直後に実施されることから、多くの学生との交流機会を設けることは困難であり、クラス内での人間関係構築に重点を置くことが第一義となる。そこで、入門セミナー内にて他クラスとの交流を図る機会を設けることの必要性も考えられるが、授業内容に鑑みても実施することの困難が予想される。したがって、学科単位で取り組む初年次教育以外にて学生が居場所を見つけられるような交流機会や環境の整備を検討することも重要であろう。

## 2. CLAS尺度得点からみた初年次教育内容の検討

本調査対象者におけるCLAS尺度得点による学生のタイプ分け結果からは、一貫して「過剰不安型」（1位）「大学拒否型」（3位）タイプ学生が上位の割合を示しているが、1回目調査と最終調査を比較すると「学業不適応型」（1.5%

減)、「過剰不安型」(4.9%減)、「日常生活不安型」(4.1%減)、「評価不安型」(2.1%減)タイプ学生の割合が漸減し、「大学不適応深刻型」(7.0%増)、「大学拒否型」(2.3%増)、「大学生生活充実型」(3.0%増)タイプ学生の割合が漸増した。また、CLAS尺度得点の比較においては、「日常生活不安:D得点」「評価不安:E得点」にて有意な差を確認し、いずれも1回目調査に比べて最終調査が低い数値を示した。「D得点」に該当する項目で有意に「はい」の回答率が減少した項目を大別すると、「他者との関係」や「進級・就職関係」、「生活費に関して」である。「E得点」に該当する項目で有意に「はい」の回答率が減少した項目を大別すると、「成績関係」や「講義に関して」、「卒業論文に関して」であった。

初年次教育における大学生基礎力ゼミ<sup>注3)</sup>が留年や休学・退学に及ぼす効果を検討した古里(2018)によれば、大学生基礎力ゼミを受講することの効果について、①退学・休学に関する大学生基礎力ゼミの効果は見られない、②留年に関して大学生基礎力ゼミ受講者は有意に少ない、③留年・休学・退学すべてに対し、大学における低成績がこれらを引き起こすことが一貫してみられたと報告している。本学科における入門セミナーはこの大学生基礎力ゼミの内容と類似していることから、特に留年や「評価不安」に対する不安軽減に効果があったと推察される。また、「今所属している大学が自分に合っていないのではないか」と思っている学生タイプ、すなわち休学・退学予備軍には「①大学不適応深刻型」「②学業不適応型」「③大学生生活不適応型」「④大学拒否型」が該当し、1回目調査の45名から最終調査の55名に増加している。更にCLAS尺度項目の比較において「大学を退学したいと思うことがあります」と回答した学生も1回目調査の15名(6.6%)から最終調査の39名(19.7%)と有意に「はい」の回答率が増加している状況からも、入門セミナーにおいても古里(2018)の先行知見同様に休学・退学には効果が見られなかったと推察される。

新学部設立後の本学科において、1学年時に退学した学生の理由(複数回答の理由も人数としてカウント)を見てみると<sup>注4)</sup>、最も多い理由が「進路変更」(15名)であり、次いで「就職希望」(10名)、「修学意欲の低下」(5名)、「経済的理由」(3名)、「入学前後のイメージのギャップ」「体調不良」(2名)、「人間関係」(1名)であった。文部科学省(2014)の調査においては、退学理由

として最も多いのが「経済的理由」(20.4%)であり、次いで「転学」(15.4%)、「学業不振」(14.5%)、「就職」(13.4%)と報告されている。本学科においては、98名(43%)の学生が本学を第一志望とせずに入學(いわゆる不本意入學)していることに鑑みても、文部科学省の調査で退學理由として最も多かった「経済的理由」よりも「転学」「就職」に該当する「進路変更」や「就職希望」を理由として退學する学生が多いことは必然的とも言えよう。しかしながら、留年・休学・退學すべてに対し、大学における低成績がこれらを引き起こす報告(古里、2018)や、本調査において夏休み前(3回目調査)から、成績公表後の夏休み明け(4回目調査)にかけて休・退學予備軍の学生が増加(3回目調査:52名、4回目調査:63名)した点に鑑みても、入門セミナー内において基礎的な力を身に着け、「修学意欲の低下」による休・退學防止につなげる取り組みは必要不可欠である。

以上のことから、本学科の入門セミナーにおいては、継続して大学生としての基礎力構築を意図した授業内容を展開することが求められると言えよう。広沢(2007)は、学習面で適応している学生は、学習面だけでなく対人面においても自信を持つと分析し、休・退學予備軍学生においては学習面での不安に加え、対人関係においても不安・自信の無さがあると推察される。さらに、康(2000)は、入學直後に対人関係がうまく構築できずにいると、学内で居場所が見つけることが困難であると述べている。基礎的な学力の欠如は、単に単位が取得できないだけでなく、大学が居心地の悪い場所になってしまうかもしれない、不適応状態の深刻化を一層招来するとも考えられる。また、友人がいるからなんとか大学に通うことができるといったことが難しくなることも考えられる。大学における授業手法の最近の傾向としては、グループワークを用いた講義が増えているが、学力が低ければグループへの知的な貢献は難しくなるだけでなく、メンバーとの信頼構築に困難が生じ、ますます授業がつまらなくなる悪循環を招いてしまうかもしれない。したがって、基礎力構築を意図した授業内容を展開するうえでは、今一度その教授方法の検討も必要であると考えられる。

ここで、教員が学生と接する際に配慮すべき点にも触れておきたい。すなわち、CLAS尺度項目の比較において「先生に『研究室までくるように』と呼ば

れたら、何を言われるか、とても気になります」に対する「はい」の回答率が有意に減少した一方で、「先生が近くにいと気になって仕方ありません」に対する「はい」の回答率が有意に増加した点である。教員の過干渉については多くの学生が負担に感じる一方で、入学理由が消極的な学生や現状が充実していない学生は教員との関係を深めたい傾向を有していることが報告されている（由良ら、2013；小塩ら、2009）。また、学生が自然に質問に行きたくなるような受け入れ態勢を、教員側が構築することが教員に対する不安感の軽減を可能にする（由良・新美、2014）といった指摘からも、教員は学生の性質を見極め、学生に対して適度な距離感を保ちつつも受容的な態度を示すことを念頭に置かなければならない。

最後に、休・退学予備軍に該当する学生に対しては初年次教育とともに、教科内外のサポートや取り組みを検討することも今後必要になると考えられる。本調査結果では取り上げていないが、最終調査において、1年を経て本学で4年間頑張ろうという気持ちに変化した不本意入学者へのインタビュー調査依頼結果では、69名の調査協力者が得られた。不本意入学をした98名のうち、この69名の学生においては何らかの理由によって本学での修学継続を決めていることが明らかとなった。これら学生においては経済的理由によって進路変更を断念したことなど様々な理由が考えられるが、不本意入学者へのインタビューをもとに本学での修学継続に寄与する要因を明らかにすることで教科内外でのサポートや取り組みに示唆を与えるデータが得られよう。

したがって今後は、今年度取り組んだ入門セミナー共通テキストによる学習効果の測定と、不本意入学者がいかなる理由にて本学での修学継続を決めたのかを明らかにし、更なる初年次教育内容の改善のための検討資料を得ることを課題とする。

## 付記

本論文は、2018年度社会文化研究所共同研究費の助成を受けて行った研究成果の一部である。

## 謝辞

本調査実施にあたりご協力とご理解を賜りました学生・SA・教職員の皆様、また、本年度から取り組まれたテキスト作成に多大なる労力とお時間を割いていただきました天龍洋平准教授、山本雄三准教授、中間信博教授に心より御礼申し上げます。

## 注

- 1) 九州国際大学HP「入学前教育・初年次教育」(<http://www.kiu.ac.jp/guide/feature/fgedu/>：2019年1月11日閲覧)。
- 2) 今年度、天龍洋平・田鹿紘・山本雄三・中間信博によって作成された「2018年度入門セミナーテキスト」(九州国際大学現代ビジネス学部地域経済学科)、p.211「おわりに」より引用。
- 3) 信州大学にて行われている初年次教育の「大学生基礎力ゼミ」の達成目標は「自分の生活と学習に責任を持てる、自立した大学生になる」ことであり、その内容は、共同作業やコミュニケーション能力の習得、大学施設の活用などによるソーシャルな適応と、正確で論理的な文章の構成の仕方を学び、学術的な文章を書けるようになるようなアカデミックな適応が実現できるよう設計されている(古里、2018)。
- 4) 本学の学務事務室を通じて入手した「現代ビジネス学部退学・除籍者に関する資料」を基に筆者が集計した。尚、個人情報保護の観点から詳細の理由については記載せず、記載された退学理由からグループ分けのみを行った。

## 文献

- 藤井義久(2013) CLASマニュアル、金子書房：東京。
- 藤井義久(1998) 大学生活不安尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討、心理学研究 68巻6号、pp.441-448。
- 藤田ミナ・岡本祐子(2010) 青年期後期における娘のとらえる母親との関係性、広島大学心理学研究第10号、pp.201-216。
- 古里由香里(2018) 初年次セミナーが留年・休学・退学に及ぼす効果—「大学生活基礎力ゼミ」を事例にした計量分析—、信州大学総合人間科学研究vol.12、pp.90-102。
- 一般社団法人日本私立大学連盟(2018) 私立大学学生生活白書2018、学生委員会学生生活実態調査分科会分科会長北条英勝編、(株)アンド・ディ：東京、p.73。
- Kanda, Y.(2013) Investigation of the freely available easy-touse software 'EZR' for medical statistics, Bone Marrow Transplant., 48, 452-458.



- 金子千香・平林茂・菅沼一男・堀本ゆかり・齋藤 孝義 (2017) 理学療法学科新入生の抱える大学生生活不安に関する2大学間の比較、理学療法科学32巻1号、pp.85-88。
- 金子千香・平林茂・菅沼一男・大日向浩・丸山仁司 (2015a) 専門職への意識と大学生活に対する入学前のイメージとが理学療法学科新入生に及ぼす影響、理学療法科学30巻4号、pp.595-598。
- 金子千香・平林茂・菅沼一男・大日向浩・丸山仁司 (2015b) 理学療法学科1年生における大学生生活不安の経時的変化とその対策、理学療法科学30巻5号、pp.689-692。
- 文部科学省 (2018) 「高等教育の将来構想に関する参考資料」 ([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo\\_4/042/siryo/\\_icsFiles/fieldfile/2018/02/23/1401754\\_07.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo_4/042/siryo/_icsFiles/fieldfile/2018/02/23/1401754_07.pdf) : 2018年12月10日閲覧)。
- 文部科学省 (2014) 「学生の中途退学や休学等の状況について」 ([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/26/10/\\_icsFiles/fieldfile/2014/10/08/1352425\\_01.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/10/_icsFiles/fieldfile/2014/10/08/1352425_01.pdf) : 2019年1月12日閲覧)。
- 文部科学省 (2008) 「学士課程教育の構築に向けて(答申)」本文 ([http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/fieldfile/2008/12/26/1217067\\_001.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/fieldfile/2008/12/26/1217067_001.pdf) : 2018年12月10日閲覧)。
- 岡田努 (2007) 大学生における友人関係の類型と、適応及び自己の諸側面の発達の関連について、パーソナリティ研究第18巻(2)、pp.135-148。
- 小塩真司、吉住隆弘、佐藤枝里、願興寺礼子、桐山雅子 (2009) 新入生は大学教員にどのようなかわりを求めているのか—学生相談室アンケートの分析から—、中部大学教育研究第9巻、pp.23-28。
- 太田雄一・桜井育子 (2003) コミュニティと危機介入—ふたつのキャンパスの学生相談における比較—、学生相談研究24(2)、pp.119-128。
- 佐野徳雄・廣瀬昇・跡見友章・西條富美代・塚田絵里子・安齋久美子・田中和哉・相原正博・平賀篤・中山彰博 (2017) 理学療法学科における大学生生活不安感の経時的変化と学年間比較、帝京科学大学紀要Vol13、pp.31-36。
- 菅沼一男・平林茂・大日向浩・金子千香 (2015a) 理学療法学科学生の大学生活における不安—大学生生活不安尺度による検討—、理学療法科学30巻2号、pp.193-196。
- 菅沼一男・平林茂・金子千香・大日向浩・芹田透・豊田輝 (2015b) 理学療法学科学生における大学生活に対する不安について—学年間の比較—、理学療法科学30巻3号、pp.475-478。
- 康智善 (2000) 「居場所」と「まなざし」の対人関係、小林哲郎・高石恭子・杉原保史編、大学生がカウンセリングを求めるとき、ミネルヴァ書房：京都。
- 山田礼子 (2013) 日本における初年次教育の動向—過去、現在そして未来に向けて—、初年次教育学会編、初年次教育の現状と未来、世界思想社：京都、pp.11-27。
- 由良亮・新美尚行・松本明夫 (2013) 大学生活における負担要因とソーシャルサポー

トに関する意識調査、東筑紫短期大学研究紀要44、pp.93-116。

由良亮・新美尚行（2014）大学生活における負担要因とソーシャルサポートに関する意識の学年間の違い、東筑紫短期大学研究紀要45、pp.191-214。